おうち de がくれきはく【美術工芸品編】　ナレーション

　小学校を中心とした，京都の市立学校には，絵画や陶芸，染色品といった美術作品が数多く所蔵されています。その数は全国のなかでも群を抜いて多く，京都の学校の大きな特徴となっています。

　これらは学校にゆかりのある画家や，地域の人々によって学校へと寄贈されたものでした。小学校開校の明治2年から今日まで，長い歴史の中で集まった美術作品が，学校を豪華に飾っていたのです。

　そのなかには，京都を代表する著名な芸術家たちの作品も多く見られます。近代を代表する日本画家の上村松園や，洋画家の安井曾太郎の作品など，美術的な価値の高い貴重な作品が残されています。

　なぜ学校にこれほどの美術作品が集まったのでしょうか。
　京都は明治2年に，全国で初めて小学校を設立したまちです。その費用や土地は政府ではなく町衆（ちょうしゅう）たちが主導して賄いました。

　京都の町民は，近代教育によって未来の人材を育成し，まちを盛り立てようと，進んで学校を建設したのです。学校は町民にとって希望の象徴であり，地域の中心でした。その大事な場所を飾るために，美術品が数多く寄贈されたのです。
　では，どんな作品があるのか，学校コレクションの一部を見てみましょう。

　明治から昭和にかけて活躍した日本画家で，竹内栖鳳の弟子としても知られる西村五雲が描いた掛け軸です。イソップ物語の「うさぎとかめ」の昔話を題材にした，穏やかな絵です。
　この作品は，本能小学校の教室を飾るために，本能学区出身の画家であった五雲に依頼されました。

　大正10年，本能小学校は火事で校舎のほとんどが焼けてしまいました。その2年後に，新しい校舎が建てられました。京都で初めてのコンクリート造りの校舎でした。この新しい校舎の教室に飾る作品として，うさぎとかめの絵が描かれたのです。

明治21年頃に，学者や画家として知られた富岡鉄斎が描いた大きな衝立です。嵐山（らんざん）小学校，今の嵐山（あらしやま）小学校が所蔵していました。学校の近くにあった車折神社の宮司として鉄斎がやってきた際に，地域の人々が小学校に飾る絵を依頼して制作されたと伝わっています。どこかユーモラスに描かれた鬼のようなモチーフは，実は魁星（かいせい）という中国の学問の神様です。鉄斎は小学生に，勉強が頑張れるようにと，この作品にメッセージを込めて贈りました。

大正から昭和を代表する洋画家の安井曾太郎が，母校の生祥小学校にカーネーションの絵を寄贈しています。安井曾太郎は明治31年に生祥小学校を卒業しました。幼いころは，算数がよくできたという話が伝わっています。画家の，小学校への思い入れが良く伝わる作品です。

陶芸家，書家，美食家など多彩な顔を持ち，近代を代表する文化人であった北大路魯山人は，梅屋小学校に花生けの陶磁器を寄贈しています。魯山人は明治26年に梅屋小学校を卒業しました。この作品は，昭和33年に魯山人が京都で個展を開いた際，久しぶりに母校を訪れて寄贈したもので，その時には同級生も集まって昔を懐かしんだそうです。

学校に残された染織作品にも，興味深いものがあります。西陣小学校には，機織りの町ならではの作品が所蔵されていました。明治25年に制作された「西陣織裂貼交屏風（にしじんおりきれはりまぜびょうぶ）」は，地域にあった西陣織の多くの織元が織った裂を集めて貼った屏風です。伝統産業への誇りを，子どもたちへ伝えようと，学校に寄贈されました。

この屏風が作られた明治25年のころは，近代の西陣の活気が最高潮に達していました。西陣織の近代化が進み，西洋の最新機械の導入により様々な文様やデザインを表現することが可能になったのです。また，明治21年に東京の明治宮殿が建設されると，皇居を飾る織物が西陣に発注されたということもありました。

明治から始まる長い歴史の中で，学校に飾られた美術作品は，いつも子どもたちの目に触れて，芸術を身近に体験させてきました。そうした文化もあって，京都の小学校からは多くの芸術家が育ち，その芸術家たちもまた，母校へと作品を寄贈したのです。

こうして，学校の美術品コレクションができたのです。そして，そのコレクションを保存，管理，展示することを目的として，平成10年に，京都市学校歴史博物館が開館しました。

京都の芸術家たちによって，子どものために寄贈された作品は，今もなお受け継がれています。